

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00037

研究課題名(和文) 医療現場における「哲学的対話実践」モデルの構築

研究課題名(英文) Model Construction of "Philosophical Dialogue" in Medical Fields

研究代表者

西村 高宏 (Nishimura, Takahiro)

福井大学・学術研究院医学系部門・准教授

研究者番号：00423161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、各診療科にあわせた哲学対話実践モデルの構築、さらにはその具体的な効果検証を可能にすべく、緩和ケア領域を中心にさまざまな実践および理論的なアプローチを重ね、医療現場における哲学的対話実践のための基盤モデルおよび哲学対話シートの作成を成し遂げた。くわえて、医療現場における哲学対話の効果検証を行うために、教育学における変容的学習尺度、心理測定尺度、さらには哲学対話実践による「探求のコミュニティ」維持のために作成された質問項目をもとに新たな評価基準も作成した。それにより、医療・ケア領域における哲学対話の効果測定にはこの評価基準が参照され、後続する他の研究に大いに貢献するものと思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療技術の急激な発展や超高齢社会の到来などに伴い、医療現場では今、医療従事者や患者、そして家族に関わりなく全ての者がそのつど自らの死生観や人生観、老い観、専門職者観などといった様々な価値観の問い直しを迫られる状況にある。医療・ケアを取り巻くそのような状況のなかで、1980年代以降活発になりつつある哲学プラクティスおよび臨床哲学の考え方に基づく本研究の成果(各診療科に合わせた哲学的対話実践モデル・基盤モデル、具体的に哲学対話の進め方をガイドする哲学対話シート、哲学対話の効果を検証できるようにする効果尺度の作成)は、医療・ケアに携わる専門職者や患者、家族にとって大きな社会的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)： In this study, we took several practical and theoretical approaches to construct a model for philosophical dialogue practice tailored to each department, mainly in the field of palliative care and to make it possible to verify the specific effects of this model. Finally, we created a basic model for philosophical dialogue practice in the medical area and a philosophical dialogue sheet. In addition, to test the effectiveness of philosophical dialogue in the medical field, new evaluation criteria were developed based on the Transformative Learning Scale and the Psychometric Scale in pedagogy and questions designed to maintain a 'community of enquiry' through philosophical dialogue practice. The evaluation criteria will be referred to for measuring the effectiveness of philosophy dialogue in the health and care field and will contribute significantly to other subsequent research.

研究分野：臨床哲学、哲学・倫理学

キーワード：臨床哲学 哲学プラクティス 哲学対話 哲学カフェ 医療現場 緩和ケア 精神医療 在宅医療

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、ドイツの哲学者 Gerd B. Achenbach が始めたと言われる「哲学プラクティス」は、哲学カウンセリングやソクラティック・ダイアログ(SD)などといった哲学的な対話実践を深く社会の内側へと接続し、社会における哲学対話の実践的な効果について批判的に検証していくことを目的とした一連の試み(哲学における新パラダイム)のことである。哲学的対話実践は、そのほかに哲学カフェや子どものための哲学(P4C)、ネオ・ソクラティック・ダイアログ(NSD)など、それぞれの状況やニーズに合わせて様々な展開をみせており、最近では、その取り組みが医療機関や教育の現場、さらには企業の社員研修などにおいても積極的に採用され始めている。本科研の研究者たちも、様々な医療機関や教育機関などに呼ばれ、医療従事者などとともに哲学的対話実践を数多く行なっている。

医療(科学)技術の急激な発展、「2025年問題」などといった超高齢社会の到来による社会構成の劇的な変化に伴い、医療やケアの現場ではこれまでに例をみないほどの大きな変化に晒されつつある。具体的には、在宅ホスピスケアなど人生の最終段階におけるニーズの多様化、医療現場を支える専門職者間の関係の複雑化(多職種連携から超職種連携などへの学問的・実践的アプローチの変化など)、さらには度重なる大規模災害などを契機とした医療専門職者と市民との関係の変化などが挙げられる。そういった混沌とした状況に伴い、医療現場では今、医師や患者、そして家族に関わりなく(あるいはケアする者、ケアされる者に関わりなく)、すべての者がそのつど自らの死生観や人生観、老い観、そして職業観などといった様々な価値観および基準の根本的な問い直しの作業を迫られる状況にある。それらは、これまでの専門職者観や専門職教育、さらには各施設内における小手先のマニュアルだけでは到底対応できそうもない課題となっている。そのような背景からか、昨今、海外の医療現場(医学教育や臨床倫理の領域も含めて)では、賛成/反対といった党派的なところから議論を始めるディベートやディスカッションなどとは異なり、それぞれの立場や考えを乗り越え、目の前のものごとに対して逆行的な(哲学的な)問いを投げかけ、他者との対話をとおして改めて自分自身の考えを逞しくしていくような対話実践の導入が試みられつつある。韓国やオランダの医療機関では、いわゆる「臨床倫理コンサルテーション」とは異なった仕方で、患者の治療方針などを決定する際にもそのような対話実践が導入されていると聞く。とくにオランダでは、20年前あたりから、医療チームが主体となって病棟内で行なう解釈学的対話型のケース検討法(MCD: Moral Case Deliberation)が積極的に採り入れられている。そこには、現在の医療現場が、もはや従来の医療倫理(臨床倫理)学的なアプローチ(原則主義やマニュアル)からだけでは到底解消しきれないような複雑な状況や関係性のうちに置かれていること、さらにはそういった状況での新たな価値観の問い直しの必要性に迫られていることが窺える。

ある観点からみれば、昨今の医療現場では対話という手法が積極的に取り入れられているとも言える。しかしながら、実際の医療現場や医学教育の場で散見される対話手法は、たとえば法学や医療安全学をベースに導入されつつある、医療者-患者・家族間の「双方向的対話」を目指す「医療メデイエーション」、精神療法領域に基づく治療的対話を試みる「オープンダイアログ」、さらには先に触れた臨床倫理領域におけるMCDの取り組みにしても、どれも医療者と患者・家族間、さらには医療職者間での情報の伝達および人的交流にのみ関心が向けられた水平的な対話志向に軸足が置かれるばかりで、そこには、対話という営みが備えている本来的なチカラを十分発揮できるような哲学的な対話志向、すなわち、医療問題に関する意思決定の際に前提とされている個々人の考えや価値判断を他者との対話をとおして改めて逞しくする機会を与える垂直的な対話志向の発想が皆無と言える。しかも、それらのアプローチはどれも一医療領域からだけの単眼的な発想・思考のもとで行なわれるものであり、医療現場の特性やニーズを真に取り入れた、諸領域横断的で体系的なシステム作りには全く着手されていない(そういった発想すらない)。したがって、本研究では、医療現場において必要とされているにもかかわらず、これまで全くと言ってよいほど着手されてこなかったこの視点(垂直的な対話志向)の欠如を補い、国内の医療現場のなかに、より体系的なかたちで哲学的な対話実践を導入していくための具体的なモデルづくりに着手した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1980年代以降活発になりつつある「哲学プラクティス(Philosophical Practice)」の考え方にに基づき、(1)医療現場における「哲学的対話実践」の必要性を理論的に基礎付け、それをもとに、(2)医療現場の様々な領域やニーズに合わせた、より体系的で実効性のある「哲学的対話実践」モデルを構築することである。

医療技術の急激な発展や超高齢社会の到来などに伴い、医療現場では今、医療従事者や患者、そして家族に関わりなく、全ての者がそのつど自らの死生観や人生観、老い観、職業観などといった様々な価値観の問い直しを迫られる状況にある。そのことから、海外の医療機関では、臨床現場における哲学的な対話の導入に関心が寄せられつつある。そこで、本研究では、終末期医療や地域医療、さらには精神医療や災害医療などの各医療領域において哲学的な対話実践の活動を

試みている医療従事者を「研究分担者・協力者」として的確に配置し、医療現場においてより体系的で実効性のある「哲学的対話実践」モデルの構築を目指した。

### 3. 研究の方法

医療現場において真に専門職者間の交流や情報伝達を可能にするためには、従来の 水平的な対話志向 と同時に、自分自身の価値観やその前提を根本的に問い直す、他者との 対話 をとおしてあらためて遅くしていく「哲学的な対話実践」( 垂直的な対話志向 )が欠かせない。そこで、本研究では、それぞれの医療領域において積極的に「対話実践」を行なっている第一人者(医療従事者)を「研究分担者」および「研究協力者」として適材適所に配置し(下図参照)、海外の医療現場における最新の対話実践や研究の精査によって理論的な基礎づけを行ないながら、国内の医療現場のなかに、より体系的なかたちで「哲学的な対話実践」を導入していくための具体的なモデルづくりに着手した。そのため、本研究では、大きく分けて以下の3つの作業軸およびそれに合わせた研究方法を設定し、研究活動を具体的に展開していく方法をとった。

#### (1) 体系的な哲学的対話実践の開催

医療・ケア領域においてより効果で細やかに配慮された哲学対話実践モデルを構築するために、まずは、哲学対話を実施する場として、 病院内において、医療従事者(有資格者ならびに学生)や患者、さらにはその家族らを主な構成メンバーとする対話の間と、 病院外の地域において、幅広く、医療従事者、当事者、家族、ボランティア、一般市民を交えた対話の場の2つの場の特性の差異を気にかけて、研究を実施した。とくに、病院内での哲学対話を実施するためには、本科研の研究分担者の専門性ならびに、これまで各所属先において哲学的対話実践の場を拓いてきた実績のある研究協力者のフィールドを活用しながら実施することを視野に入れた。ちなみに、各領域担当は以下のように振り分けた。

研究分担者	研究協力者
近田真美子：精神看護、災害看護	鈴木聡(石巻赤十字病院副院長)
田村恵子：成人看護、がん看護	三浦正悦(穂波の郷クリニック院長)
孫大輔：在宅医療、医学教育	杉林稔(愛仁会総合健康センター所長)
研究代表者がすべてを統括	太田圭祐(安城更生病院・脳血管内治療医長)

それにより、どの診療科がどういったスピード感や問いのたて方、メンバー構成を必要としているのか、さらには一般市民をくわえた地域での対話の間は病院内のそれと比べてどういったメリット/デメリットがあるのか、それぞれの特性に合わせた哲学対話実践の効果の検証が可能となった。実際にはこの検証をおして、病院内において哲学対話の間をつくりやすい診療科とそうでない診療科(もちろんそれはそれぞれの診療科が主に扱う疾病の特性にも依存して変わってくる)、あるいは、より効果が見込めそうな科とそれほどでもない科、さらには患者や家族を対話に迎え入れやすい場と、むしろ専門職者に対する研修的な意味での哲学対話の方がその効果が見込めそうな科など、いくつかのふるいわけが可能となり、モデル構築の作業において大いに参考になった。

#### (2) 医療現場における「哲学的対話実践」の理論的な基礎付け作業

1980年以降の「哲学における新パラダイム」として展開されつつある「哲学プラクティス」にかかわるテキスト(たとえばドイツの哲学者ゲルト・アヘンバッハ、哲学カウンセリングの理論的基礎付け作業を行ってきたピーター・B・ラービ、エラスムス哲学実践研究所のピーター・ハーテロー、イスラエルにおいて哲学プラクティショナーとして重要な仕事を展開してきたシュロミット・シュースターなどによる論考)を批判的に吟味する作業をおして、医療現場における哲学対話の試みを理論的な側面から基礎づける作業を行なった。

さらに、この試みと合わせて、医療従事者で行なってきた哲学的な対話実践が、いわゆる 傾聴 や 共感 などといった「支持的療法(心理療法)」とどう異なるのか、あるいは、近年注目を集めている「オープンダイアログ」などの「治療的対話」、法学や医療安全学をベースに導入されつつある「医療メディエーション(医療者 患者の双方向的対話)」、そして、臨床倫理の文脈などにおいて採用されつつある対話実践などどのように異なり、また、医療現場においてどのような役割を担うのかについても理論的な検証を行った。そして、最終的にこの作業は、「哲学プラクティス」の展開する哲学対話実践などの 非治療的 なアプローチが、いわゆる心理療法などの 治療的 なアプローチとは異なり、当事者やその関係者に対してどのような「効果」を生んでいるのか、また、哲学カウンセリングなどの哲学対話と心理療法とのあいだにはどのような関係性が存在しているのかについて、とくに精神医療領域における哲学対話実践の可能性も含めて根本的に問い直し、吟味すべきではないのかといった今後さらに取り組むべき課題を呼び込むこととなった。

#### (3) 医療現場における「哲学的対話実践」モデル(基盤モデル)の構築作業

上記(1)と(2)の作業をもとに、各領域での実践・研究をあらためて吟味し、その関係性を考慮しながら、各領域の担当者との綿密な議論をおして、より横断的で体系的な「哲学的対話実践」モデル、とくに、すべての医療領域に使用可能なものとしてこれまでの作業のなかで構築した哲

学対話実践の暫定モデルを作成し、その効果検証を行った。具体的には、2022年10月から2023年3月の間で、京都大学大学院医学研究科緩和ケア看護学分野に関わる看護師・大学院生および看護教員10名程度を対象に3回の哲学対話の研修プログラムを再度実施し、プログラムの前後および終了2か月後の計5回アンケート調査を実施し、「暫定モデル」のあり方を精査した。その際、その暫定モデルの効果検証を徹底的に行う必要があったため、本研究では、医療現場における哲学対話の効果検証を行うための客観的な評価基準の作成、アンケート項目などの整理作業も同時に行った。現在は、回収したアンケートの尺度分析を、SPSS等を用いて前後スコアの平均値の差の検定などを軸に行うとともに、質問紙の自由記載データについては内容分析を用いて質的分析を実施中である。とはいえ、コロナの影響が大きく、今回の科研の成果の一つである「基盤モデル」をさらに各領域で運用し、その作業を通してより詳細な領域ごとの哲学対話実践モデルの構築を行っていく作業がスケジュールどおり遂行されていない。これについては本科研をさらに展開させ、今後の研究に引き継いでいきたい。

#### 4. 研究成果

本科研では、最終的に各診療科にあわせた「哲学対話実践モデル」の効果検証の作業を、とくに緩和ケア領域を中心に複数回行い、それらをもとに、まずはすべての医療領域や一般市民を交えての対話の場で適応可能な「基盤モデル」の構築と、個々人の哲学的思考の流れをガイドする「哲学対話 自己確認シート」の作成を成し遂げた。とくに、後者の「哲学対話 自己確認シート」の存在によって、日々の慌ただしい業務に追われ、また哲学的な思考に不慣れな医療スタッフ間であっても、速やかに各診療科において、それぞれの問題関心から哲学的な対話の場をひらくことが可能となった。この点は本科研での大きな成果の一つと言える。

あわせて、本科研では、医療現場における哲学対話の効果検証を行うために、米国の教育学者 Jack Mezirow の変容的学習理論に基づく変容的学習尺度、心理測定尺度、さらには哲学プラクティショナーの Thomas E. Jackson が「探求のコミュニティ」のために作成した質問項目などを参考にしながら、これまでにない新たな評価基準を作成することができた。これにより、医療・ケア領域における哲学対話の効果測定の際にはこの評価基準が参照され、後続する他の研究にとっても大いに貢献するものと思われる。現在は、回収したアンケートの尺度分析を、SPSS等を用いて前後スコアの平均値の差の検定などを軸に行うとともに、質問紙の自由記載データについては内容分析を用いて質的分析を実施中である。今回の研修プログラムの結果および医療現場における「哲学的対話実践モデル」構築に関する総合的な成果報告については、新型コロナウイルス感染拡大の影響で本研究の遅滞を余儀なくされたこともあり、今後、関連する学会において随時行っていく予定である。そこで、さらに様々な領域の研究者・実践家と意見交換を行い、医療現場における「哲学的対話実践」モデルの構築作業をいっそう推し進めていく予定である。

そのほか、当該研究においては、2022年8月に、「医療と文化——ラオスにおける医療実践から考える」と題した公開シンポジウムを行い、文化的・宗教的な背景の差異に因る医療現場におけるディスコミュニケーション、対話を阻害する要因をいかに同定・解消すべきかについて、実際にラオスで医療活動を行っている医師・看護師をゲストに迎えて医療人類学的な観点から対話の可能性について積極的な意見交換を行うことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 近藤めぐみ, 田村恵子	4. 巻 21; 31(Suppl):
2. 論文標題 患者サロンをウェブで - 地域の患者サロン(ともいき京都)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 緩和ケア	6. 最初と最後の頁 114-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村恵子	4. 巻 32
2. 論文標題 学際的チームにおける医療者の考えの違いによる衝突への対応	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 緩和ケア	6. 最初と最後の頁 124-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉田智子, 吉岡さおり, 坂井みさき, 田村恵子, 本間なほ	4. 巻 31
2. 論文標題 地域社会で生きるがんサバイバーを支援する スタッフ養成経験型対話学習プログラムの試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立医科大学看護学科紀要	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近田真美子, 阿保順子, 福山敦子, 安里順子, 森野貴輝, 小村絹恵	4. 巻 -
2. 論文標題 精神看護の専門性を問い直す	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会第31回学術集会・総会プログラム集	6. 最初と最後の頁 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oishi Y, Son D, Hotta S.	4. 巻 13
2. 論文標題 The value and impact of a health cafe organized by primary care physician, on visitors, clinics, and the community: a qualitative study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 J Prim Care Community Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/21501319221088668	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Egashira M, Son D, Ema A.	4. 巻 10(1):e28982
2. 論文標題 Serious game for change in behavioral intention toward lifestyle-related diseases: experimental study with structural equation modeling using the theory of planned behavior.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JMIR Serious Games	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Son D, Iguchi M, Taniguchi SI.	4. 巻 22(5)
2. 論文標題 Death education for doctors: Introducing the perspective of death and life studies into primary care physician training.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 J Gen Fam Med.	6. 最初と最後の頁 309-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫 大輔	4. 巻 advpub
2. 論文標題 患者の語りを用いたプロフェッショナリズム教育：ナラティブと共感	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 薬学教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24489/jjphe.2022-006	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫大輔	4. 巻 6(4)
2. 論文標題 健康と社会を考える コミュニティ・ウェルビーイングと健康格差	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 プライマリ・ケア: 実践誌	6. 最初と最後の頁 43-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫大輔	4. 巻 70
2. 論文標題 医療者がまちに出るとのこと：モバイル屋台de健康カフェの活動から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家庭科	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫大輔	4. 巻 109
2. 論文標題 地域医療を実践する内科医とは 具体的な地域医療活動 地域住民との対話	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本内科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 2364-2369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫大輔, 森田敬史	4. 巻 103
2. 論文標題 臨床と宗教: 死に臨む患者に私ができること (第1回) 臨床宗教師の誕生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 治療	6. 最初と最後の頁 230-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 孫大輔, 森田敬史	4. 巻 103
2. 論文標題 臨床と宗教: 死に臨む患者に私ができること (第2回) 現代の宗教観と臨床宗教師のあり方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 治療	6. 最初と最後の頁 372-376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近田真美子, 西村高宏	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 デイケア“そもそも”論 : 「てつがくカフェ」で考えてみる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デイケア実践研究	6. 最初と最後の頁 78-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村高宏	4. 巻 vol.101(No.7)
2. 論文標題 対話と哲学 : 哲学対話の実践より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 治療(南山堂)	6. 最初と最後の頁 804-807
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Son Daisuke, Tsukahara Mihoko	4. 巻 41
2. 論文標題 Tolerating Uncertainty: New Possibilities of Open Dialogue in Primary Care Practice	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 An Official Journal of the Japan Primary Care Association	6. 最初と最後の頁 129 ~ 132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14442/generalist.41.129	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計27件（うち招待講演 19件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 臨床哲学って何？ 曖昧な私と向き合うためのアート
3. 学会等名 名古屋造形大学「文化庁による令和3年度 大学における文化芸術推進事業 CITY BEAUTIFUL：地域社会における『対話』を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 医療現場に“哲学対話”を挿し込む “哲学対話”をとおして自身の 価値観 をほぐす
3. 学会等名 第27回 日本看護診断学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 医療現場における“哲学的対話実践”モデルの構築
3. 学会等名 科研費公開シンポジウム「医療現場における『リフレクティング』の可能性を問う」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 医療現場における「倫理教育」の困難さ “moral sensitivity”を逞しくするために
3. 学会等名 第 25 回 公益社団法人日本顎顔面インプラント学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 “医療倫理”とは何か “ソーシャルワーク専門職の倫理”を考えるために
3. 学会等名 福井県医療ソーシャルワーカー協会・研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kondo M, Sugita T, Maetaki E, Sakai M, Ichihara K, Tamura K.
2. 発表標題 The wisdom to survive with cancer in the narrative from participants in the interactive support activity for cancer survivors.
3. 学会等名 EAPC 17th World Congress Online
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 シンポジウム「がん患者の意思決定を支えるコミュニケーション」座長
3. 学会等名 第36回 日本がん看護学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 看護WG企画 1「スピリチュアルペインとそのケア 医療者が臨床現場でできること」座長
3. 学会等名 第34回 日本サイコオンコロジー学会総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 終末期における患者・家族とのコミュニケーション
3. 学会等名 第34回 日本サイコオンコロジー学会総会 「心理コミュニケーションWG企画1 『終末期における患者・家族とのコミュニケーション』」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 対話と傾聴
3. 学会等名 京都がん看護専門看護師(OCNS)会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近田真美子
2. 発表標題 サイエンスアゴラ2021「対話、足りてますか？ コロナとこれから」
3. 学会等名 日本科学未来館主催事業 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 「哲学対話」をととして医療現場のコミュニケーションをデザインする
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第46回大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 震災に臨む：被災地で哲学対話の場を拓く
3. 学会等名 日本哲学プラクティス学会第2回大会シンポジウム「哲学プラクティスとコミュニティ創生」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西村高宏, 近田真美子
2. 発表標題 医療現場に“哲学対話”を挿し込む
3. 学会等名 金沢がん哲学外来研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 私のナラティブとしてのAdvanced Care Planning
3. 学会等名 緩和・支持・こころのケア 合同学術大会シンポジウム「対話を通じたAdvanced Care Planning」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 孫大輔
2. 発表標題 慢性疾患患者と医師の ダイアローグ
3. 学会等名 第63回日本糖尿病学会年次学術集会シンポジウム「慢性疾患を抱えて生きる患者と共に生きる医療者の心構え」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 孫大輔
2. 発表標題 家庭医による 対話 : 診療・コミュニティ活動における事例より
3. 学会等名 日本哲学プラクティス学会第2回大会シンポジウム「哲学プラクティスとコミュニティ創生」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 孫大輔
2. 発表標題 対話する医療：人々のケアにおけるダイアローグ
3. 学会等名 第9回日本理学療法教育学会学術大会(教育講演)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takahiro Nishimura
2. 発表標題 The Significance and Possibilities of Introducing “Philosophical Dialogue” in Medical Practice: Through a Comparison with Moral Case Deliberation
3. 学会等名 XVI Annual Conference of the International Society for Clinical Bioethics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村高宏 近田真美子
2. 発表標題 哲学対話で考える「デイケア“そもそも”論」
3. 学会等名 日本デイケア学会 第24回年次大会札幌大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村高宏 近田真美子
2. 発表標題 自分らしい「死」とは？「哲学対話」の誘い
3. 学会等名 第3回日本 エンド オブ ライフ ケア学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 医療現場に「哲学対話」を挿し込む「臨床哲学」の観点から
3. 学会等名 第38回日本医学哲学・倫理学会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村高宏 近田真美子
2. 発表標題 てつがくカフェ「災害看護における『リーダーシップ』とは？」
3. 学会等名 日本災害看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村高宏 近田真美子
2. 発表標題 「プロフェッショナルの拡大、拡張、変容 / 第2部」 てつがくカフェ「『プロフェッショナル』とは何か？」
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村高宏
2. 発表標題 「対話をととして震災を 見る / 医療現場における『哲学的対話実践』の試み」
3. 学会等名 日本臨床倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 孫大輔
2. 発表標題 「不確実性に耐える：プライマリ・ケアにおけるダイアローグの可能性（教育講演14：プライマリ・ケアと文化人類学 ナラティブとオープンダイアローグの可能性）」
3. 学会等名 第9回プライマリ・ケア連合学会大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 孫大輔
2. 発表標題 「対話する医療：人々のケアにおけるダイアローグの可能性（特別講演）」
3. 学会等名 平成30年度奈良県看護学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 孫大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 南山堂	5. 総ページ数 552
3. 書名 日本プライマリ・ケア連合学会 基本研修ハンドブック（改訂3版）, 「地域診断と地域との協働」	

1. 著者名 孫大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本医事新報社	5. 総ページ数 220
3. 書名 総合診療×心療内科 心身症の一步進んだ診かた(森川暢, 他編)	

1. 著者名 Iwakuma M, Son D.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 620
3. 書名 Cultural Fusion in Physician-Patient Communication and Decision-Making in Japan. In Oxford Research Encyclopedia of Communication	

1. 著者名 島園洋介, 孫大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 医師・医学生のための人類学・社会学(飯田淳子, 他編), 「『不定愁訴』を訴え続ける患者と向き合う」	

1. 著者名 孫大輔	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 390
3. 書名 『指導医のための医学教育学 実践と科学の往復』錦織宏・三好沙耶佳 編, 「Chapter 26 現象学の医学教育学における可能性」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	近田 真美子  (Konda Mamiko)  (00453283)	福井医療大学・保健医療学部・准教授    (33404)	
研究分担者	田村 恵子  (Tamura Keiko)  (30730197)	京都大学・医学研究科・教授    (14301)	
研究分担者	孫 大輔  (Son Daisuke)  (40637039)	鳥取大学・医学部・講師    (15101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関